

BILZARD
ENTERTAINMENT

OVERWATCH 2

CELEBRATE
PRIDE



過ぎ去りし未来

MELISSA SCOTT 著

ストーリー

MELISSA SCOTT

イラスト

GORLASSAR

編集

CHLOE FRABONI

デザイン&アートディレクション

COREY PETERSCHMIDT

クリエイティブ・コンサルタント

JEFF CHAMBERLAIN, MIRANDA MOYER, NESSKAIN,
DION ROGERS, JOSHI ZHANG

プロダクション

BRIANNE MESSINA, CARLOS GARCIA RENTA,
TAKAYUKI SHIMBO, VALERIE STONE



© 2025 Blizzard Entertainment, Inc. BlizzardおよびBlizzard Entertainmentのロゴは、米国およびその他の国における Blizzard Entertainment, Inc.の商標または登録商標です。

Published by Blizzard Entertainment.

このストーリーはフィクションです。本作品に登場する名前、キャラクター、場所、出来事は、著者または作画者の想像による産物または架空のもので、実在する人物（存命中または故人）、出来事、団体、場所に類似するいかなる描写も、風刺的な意図はなく、偶然によるものです。

Blizzard Entertainmentは著者や第三者のウェブサイトもしくはそのコンテンツを管理しておらず、またそれらについて一切の責任を負いません。

過ぎ去りし未来

日曜日の朝、ハンティンドンの研究所内部はもぬけの殻だった。きつと昨日の夜に州立大学がセント・トーマス大学に勝ったからだろうと思いつつ、ジャック・モリソンは東側の扉の近くにオンボロのセダンを停めた。誰も彼もが徹夜で勝利を祝い、朝寝坊を決めている週末だというのに、ジャックに休暇の文字はない。この講習は次の昇進に向けた重要な一歩だったし、ジャック自身にとっても興味深いものだった。急速に発展するテクノロジーの数々——。噂になるような代物のなかにはジャックの部隊にとって役に立つものもあった。巷で書かたてられている磁気浮上式の輸送機関や、ほぼ完全な知性を備えたロボットのことはない。それらの実現はまだ当分先のことだろうが、ジャックが研究しているテクノロジーは、今まさに実現しようとしているものだった。今ここでそのテクノロジーに関する知見を深めれば、今後の脅威へもより柔軟に対応できるだろう。

ジャックはロボット工学部の第十二研究室に入り、いつものワークステーションにノートパソコンを接続した。プロジェクトのタイトル——*偵察における多目的ドローンとマンパワーの融合*——が表示されると、シミュレーションを開く。部隊の士気を示すのにちょうどいい指標はまだ思いついていなかったが、それ以外はうまく機能している。ジャックは初期条件をいじり、先週の議論で取り上げられた銃撃戦を再現しようとした。

そのとき、通路の反対側で何かが爆発した。

思わず飛び上がったジャックは、何か武器に使えるものはないかと、無意識に部屋を探った。すると、二度目の爆発。ジャックは部屋にあった消火器を手にとった。化学実験用の第十研究室の扉を押し開けると、割れたガラス片、陶器、酸っぱいにおいのする液体

が床中に散らばっていた。中央の作業台の上では、実験器具らしき何かが煙と火花を放っている。持ってきた消火器は電気火災に対応したものではなかったので、ジャックはそれを捨てて作業台に駆け寄り、コンセントからケーブルを引っこ抜いた。と同時に、黒髪の若い男が自身の消火器を振り上げて二回噴射し、器具を白い粉末で覆った。精密な噴射だった。飛びのいて噴射から離れたジャックに、男は申し訳なさそうな顔を浮かべた。

「ごめん、大丈夫かい？」

ジャックは頷いた。

「そっちは？」

「大丈夫」

男は消火器を脇に置くと、壊れてしまった装置を指で突いて顔をしかめた。

「ケーブルを抜いてくれてありがとう」

ジャックは液体から漂ってくるにおいの異様さに気づいた。このにおい、あの最悪なバーで嗅いだものとかかなり似ている。

「それ...ビールか？」

男は苦笑いを浮かべた。

「まあ、ビールだったものだよ。いや、“なるはずだったもの”と言うのが正しいかな...聞かれる前に白状すると、ビールを作るつもりだったんだ。僕は実験考古学214でティーチング・アシスタントをする。毎学期ね。テオコボロス教授がハトホル神殿で見つけたレシピを使いたがって。僕も、神殿で酒の保存に使われてたと思われる方法を試したかったんだ。けど、見たところ、僕らの仮説はどこか間違ってたみたいだ」

「らしいな」

ジャックは研究室を見まわしながら言った。向こうの壁の棚に置かれた大型のガラス製容器は無傷のように見えたが、別の棚はひっくり返っていた。そこには陶器の瓶やガラス製のカーボイが置かれていたようだが、落ちた衝撃ですべて砕けている。そして辺りを漂う“ビール”の悪臭は、言葉では言い表わせないほどだ。作業台の上で、別の中瓶が爆発した。どうやら、装置をショートさせた原因はこの瓶の中身らしい。若い男は悲しそうな顔で惨状を見やって、首を横に振った。

脅威が去ったことがわかったと、ジャックは助けてやったその男を見た。黒髪で、ほっそりしていて、冬の終わりだというのに日焼け跡があり、ジムで鍛えたものとは思えない筋肉がついていた。ジャックはふと、自分が男をまじまじと見つめていることに気づいた。

(馬鹿なことを考えるなよ)

思わず自分にそう言い聞かせる。

「片づけるのを手伝おうか？よかったらの話だが」

「そっちの仕事の邪魔をしたくないから、遠慮しとくよ」

男は言った。

「そういえば、僕の名前はヴィンセントだ」

「俺はジャックだ」

ジャックが無意識に手を差し出すと、ヴィンセントはその手を握った。

「俺はロボット工学の第十二研究室でシミュレーションを走らせてたところだ。放っておいてもプログラムは進む」

「そういうことなら...もちろん、手伝ってもらえると助かるよ」

ヴィンセントは周囲を見た。

「少なくとも、あの方法がビールを発酵させる方法じゃないってことがわかってよかった。まあ、爆発させる必要なんてなかったんだけど」

ヴィンセントはゴミ箱を見つけると、ガラス片や陶器を拾いはじめ、ジャックもそれに続いた。

「ところで気になったんだが、なんでビールなんか作っているんだ？」

しばらくして、ジャックは尋ねた。

「レシピがあるならそれで十分だろう？」

「古代世界の“レシピ”っていうのは、たいていの場合、作り方がわかっている人たちのためのメモみたいなものでしかないんだよ」

ヴィンセントは説明した。

「今回は結婚式用の特別なレシピみたいで、僕たちにはよくわからない材料が使われてるんだ」

「古代エジプト人は結婚式に酒を飲んだのか」

会話を続けたかったジャックはまた尋ねた。ヴィンセントは頷き、ガラクタをゴミ箱に入れる。

「ああ、いつでもどこでもさ。王家に仕えていた人々には毎日一ガロンほどの酒を支給されてたほどだ。酒の多くは神殿で醸造されててね。今回のメモに書かれていた酒は、普通の酒よりも長期間保存することに念頭を置いた、王家の結婚式用らしいんだけど、それを何とか再現しようとしたら...」

ヴィンセントは小さな瓶の首を持ち上げた。まわりついた液体がタールのように糸を引いている。

「この様だよ」

「それで、ビールを作る理由は？古代の酒を味わってみたいだけか？」

「昔の人々がどのように作ってたのか知りたいのさ」

ジャックの期待どおり、ヴィンセントは笑ってくれた。いつになく暖かな感じを覚える。シミュレーションのことは、もはやどうでもいいことのように思えた。

ヴィンセントは急に真剣な面持ちになり、背筋を伸ばして言った。

「ローマ式のコンクリートを作るのに海水が必要だったなんてことは、当時の文書に記録されてなかった。その重要な情報はただ口づてにだけ伝えられて、ローマが減びると同時に失われた。だけど、ローマの建築物がこれほど長く存続してる理由は、その失われた情報にあったんだよ。このビールも同じさ。なぜ王家の結婚式で提供されるほど特別だったのか、このビールからほかにどんな情報が得られるのか、このビールに込められた重要な意味は何なのか…僕はそれを知りたい。今回は失敗したけど、まだ比較用のサンプルが残ってるから、実験は続けられる。あの大きなガラスのカーボイに入ってる液体がそうさ」

ヴィンセントは苦笑いを浮かべた。

「それに上手くいけば、学部生ももっと真面目に聞いてくれるからね」

ジャックも、にやりと笑いかえた。

「だろうな」

「部学生にはあまり試飲させないようにしてるけど」

「そのビールを自分の結婚式では飲まなかったのか？」

「僕は…まだ独身だよ」

ヴィンセントはガラス片を持ち上げておいを嗅ぎ、顔をしかめた。

「それに、このビールの“香り”を嗜むにはまだ早すぎる」

「ひどい酒はもっとにおうぞ。その酒を出したバーには、もう二度と行かなかったがな」

ジャックの期待どおり、ヴィンセントは笑ってくれた。いつになく暖かな感じを覚える。シミュレーションのことは、もはやどうでもいいことのように思えた。

「それで最後だね」

ヴィンセントは言った。

「この棚を戻すのを手伝ってくれたら、掃除機を探してくるよ」

「モップも必要だぞ」

ジャックがそう言うと、ヴィンセントは頷いた。

「そうだね」



「俺が手を貸してやる」

「大変な仕事を手伝ってくれる人がいるのは、やっぱりうれしいもんだね」

ヴィンセントは言った。ジャックは自分の顔がにやけるのを感じた。

ジャックは倒れた棚を引き上げ、ヴィンセントが棚に備品を戻している間、そのフレームをまっすぐに支えた。それから一緒に床を掃除した。盛大にまき散らされた消火剤の跡は、ヴィンセントがしっかり片づけていく。ジャックが周囲を見まわすと、棚に置かれた大きなガラス瓶の一つが不気味に泡立ちはじめていた。

「何があったんだ？」

ヴィンセントは小声で悪態をつき、棚から瓶をひたたくて研究用の机に置いた。瓶の蓋をいじると、壊れるように開いた。ビールが間欠泉のように吹き出す瞬間、ジャックはヴィンセントの顔の前を手で覆ってやったが、二人とも飛び散る泡にまみれてしまった。二人はお互いを見て力なく笑った。

一段落して、お互いを見つめ合う二人。やがて、ヴィンセントが息を吸っていった。

「いろいろ手伝ってくれたお礼としてはなんだけど、結婚式用のビールを飲んでみないかい？ 飲める状態になったら、さ」

何かを不安がるような、期待するような笑顔をヴィンセントは浮かべていた。

「もちろん、興味があればの話だけど」

これはチャンスだな、とジャックは思った。

「そいつはデートの誘いか？」

ジャックの言葉に、ヴィンセントの笑顔が大きくなっていく。

「そう思ってくれるかい？」

貨物運搬機が大きく旋回して、最終進入の準備を整えた。ジャックはルナサピを擁する山々が明るい空に向かってそびえ立つのをちらと見た。斜面から吹きつける風は予測不可能だったが、操縦士は手際よく滑走路に着陸させていく。副操縦士の椅子に座るジャックは、現地の管制官が商業用格納庫の影にあるゲートへと操縦士を案内する声をぼんやりと聞いていた。

「快適なフライトだった」

操縦士はエンジンを止めるとヘッドセットを外した。

「そりゃどうも。貨物ローダーが来るまで二十分ぐらいある」

ジャックは頷いた。敷地を区切るフェンスの切れ目をすり抜け、下草に身を隠すのに

は十分な時間だ。安全ベルトを外すと立ち上がり、伸びをして、コックピットの外にしまっておいたバックパックを取った。

「貨物のラベルにはどれもオアシスと書いてあったな。連中がここで何をやっているんだ？」

パイロットは肩をすくめた。

「最近はおアシスがらみの貨物が多くてね。ルナサビに研究所を建ててるって噂だ」

ジャックは頷くと、ソンプラに頼まれた仕事と貨物の関連性を考えた。あいつの狙いは誰だろうか？オアシスの科学者集団を狙っていたとしても、おかしくはない。これから会う相手にあいつの目的を達成するだけの能力があればいいが――。ジャックは、上着の内ポケットに入れてあるデータ・ドライブを指で叩いた。

操縦士がレバーに手を伸ばし、強く引っ張った。ジャックの足元のパネルが開く。飛行機の下の滑走路が降下用チューブの先に見えた。ジャックは上着の中に手を入れて謝礼を掴み、操縦士に渡した。

「どうも」

操縦士は受け取ってポケットに入れた。

「帰りも乗ってくかい？明日の朝、七時きっかりに、ここを出る」

「考えておこう」

ジャックは降下用のチューブにバックパックを滑らせて、チューブの端に腰かけると、降りるのにちょうどよさそうな掴み手を探った。

「俺が来なかったら、待たなくていい」

「了解。幸運を」

「ありがとう」

ジャックは再び礼を言って地面に降りた。飛行機が作り出す巨大な影のおかげで、降下は簡単だった。ジャックはバックパックを拾い、周囲を見わたす。今は誰もこちらを見ていない。ジャックは敷地を囲む錆びた有刺鉄線とへ向かい、誰かが切った隙間をすり抜けると、身をかがめて下草に隠れた。飛行場の中で動くものは何もない。やがてジャックは木々の間へと消えていった。

正午にはルナサビの郊外の低地に位置する、農作物が植えられた台地に着いていた。崖の側面の切り込みを見上げると、内側に傾斜した壁を持つ街の建物が見えた。その重厚な壁は、古代ペルーの建築様式を模したものらしい。ルナサビの話はヴィンセントから聞いたことがあった。古代建築を再現することで、戦後都市の威厳を高め、未来を形づくる過去を顕彰しているとのことだった。だが、目的地はその建物ではなかった。

（彼女は、大惨事の現場にいるわ。現場ってのは記念碑のことじゃないわよ？とにかく

(彼女は大惨事の現場にいるわ。現場
ってのは記念碑のことじゃないわよ？
とにかく近くまで行けば、向こうがあ
なたを見つけてくれる)
そうソンプラは言っていた。

近くまで行けば、向こうがあなたを見つけてくれる)

そうソンプラは言っていた。

ジャックは彼女が見せてくれた地図を思い出しながら、現場への脇道を調べる。道沿いの茂みの切れ目を探すと、それはあった。一見すると偶然が作り出したような切れ目だが、よく見てみると、丘の上へ通じる道がその先に見える。ジャックはバックバックを背負って道をたどった。

道の傾斜は次第に大きくなっていった。場所によっては、両手を使わなければ先に進めないぐらいだ。ラマはこんな道を通っているのかとも思ったが、こんな斜面はラマですら越えられないだろう。やがて急斜面を超えると、尾根の向こうに小さな谷が見えた。谷の中心にはかつて建物があつたようだが、今は廃墟同然で、屋根がなく、壁だけがまばらに残っている。その真ん中には、てっぺんが広く平らな階段状のピラミッドがある。間違いない、大惨事の現場だ。

ジャックは尾根の後ろに身を隠してHUDを起動させると、廃墟の周囲を探った。丘を登ってきた後に受けるそよ風は冷たく、心地いい。幸い、廃墟に人の気配はなさそうだ。ジャックはバックバックを下ろして下草に隠すと、パルス・ライフルを取りだして、慎重に丘を下りはじめた。

廃墟に近づくにつれて、道のあちこちにちらばる建材の残骸の数が増えていく。ジャックは道を塞ぐそれら残骸を注意深く避けながら先へと進んだ。ここで何が起こったのかはわからないが、相当な力が解き放たれたのだろう。ほんの一瞬だけ、チューリッヒのオーバーウォッチ本部を襲った爆発音の残響が脳裏を巡った。これほどの破壊をもたらしたからには、ここでの爆発も同じぐらい強烈なものだったに違いない。

するとバイザーの警告が点滅した。マントを羽織った人影が黄金のライフルを彼に向けているのが見える。ジャックは身をかわし、転がりながらその場を離れて銃を構えた。

「ソンプラに言われて、ここに来た！」

ジャックが叫ぶと、マントの人影は立ち止まり、構えを解いた。よく見ると、その人物は

かなり若い女だった。髪には、身に着けたアーマーとよく合う黄金のメッシュが流れている。

「お前が来るとは聞いてない」

「ソンプラがよろしくと言っていた」

ジャックはお決まりの返事を待ったが、相手は武器を下ろそうとしなかった。

「私はイラリー。お前に見せたいものがある」

今度こそイラリーは武器を下した。

「ついてきてくれ。こんな場所で話はいけない」

ジャックはバックパックを拾ってイラリーのあとを追って廃墟を出ると、さっきとは別の曲がりくねった急峻を進んだ。その道は反対側の尾根に通じており、それを超えるとやがて懸谷に出た。そこには崖に寄りそうようにして立つ壊れかけの小屋がある。近づくにつれ、それが洞窟を隠すための建物であることにジャックは気づいた。

「ここだ」

イラリーは言った。

「ここなら話ができる。オアシスの目は街のあちこちにあるからな」

ジャックはためらったが、イラリーに続いて中に入った。洞窟の中は、思ったよりも設備で充実していた。壁の片側にモニターとプロセッサが組み込まれており、カーテンで仕切られたくぼみにはベッドと椅子に加え、明るい模様の布が掛けられたテーブルも置かれている。

イラリーがジャックを見た。

「私に見せたいものとは？」

「ジャケットに入ってる」

ジャックは自分の胸元に触れた。

「見てもいいか？」

「ああ」

イラリーはライフルを構えはしなかったが、手放そうとしなかった。

ジャックはジャケットを開くと、内ポケットにゆっくり手を入れ、データ・ドライブを取り出した。

「お前が欲しがっていたウイルスだ」

イラリーはそれを受け取った。

「感謝する」

ジャックはそれに続く言葉を待ったが、イラリーはそれ以上何も言わなかった。ソンプラによると、イラリーはデータ・ドライブと引き換えに情報を提供してくれるはずだった。

「そんな仕事はソンプラから聞いちゃいない」 ジャックが応える 「私も会う相手があなただとは、ソンプラから聞いてなかった」 イラリーもそれに応じた。

もちろん、ソンプラがはっきりとそう言ったわけではない。もってまわった言い方はソンプラの十八番だった。一杯食わされたか——。腹を立てたジャックは顔をしかめ、バックパックに手を伸ばした。

「用は済んだな」

ジャックがそう言うと、イラリーの目が鋭くなった。

「私はこれを、このルナサピにあるオアシスの研究所にいつか仕掛けられたらと思っていた...いや、何としても仕掛けなければならない。潜入を手助けしてくれないか？」

「そんな仕事はソンプラから聞いちゃいない」

ジャックが応える。

「私も会う相手があなただとは、ソンプラから聞いてなかった」

イラリーもそれに応じた。

「あなたのことは学校で聞いた。少なくとも、死んだと言われる前のあなたのことを。強化兵士、元オーバーウォッチ・ストライク・コマンダー。ジャック・モリソン...」

「大昔の話だ」

「だとしても、あなたがいれば、この不利を覆せる」

イラリーの言うとおりだ。一人よりは二人のほうがいい。オアシスの最新施設に潜入するのであればなおさらだ。太陽神の戦士がいつ壊滅したかはよく知らないが、イラリーの顔に残るあとけなさを見れば、彼女が他の戦士と長い間行動をとともにしていたとは思えない。何よりオアシスには、あのモイラ・オデオレインが所属している。彼女を雇うような組織に損害を与えて後悔したことは、これまで一度もなかった。

ジャックは頷いた。

「わかった。手を貸そう」

「感謝する」

イラリーもライフルを置いた。

「今から作戦について、基本的なことから教える」

数週間ぶりの休暇だったが、ジャックは休む資格が自分にあるとは思えなかった。オムニックの軍勢を倒せたわけでもない。こちらはかろうじて陣地を保っているだけだ。運のいいことに、オムニックたちは力押しで突破口を開こうとはせずに撤退した。他のもっと重要な目標のために戦力を集中しようとしていることは明らかだった。

電力の復旧を示すように、街には明かりが灯っていたが、立ち並ぶ建物はというと、ミサイル攻撃やその後の火災によって破壊されていた。ヴィンセントが無事だということは、朝、本人から連絡があったから知っている。それでも、二人で住むアパートに近づくと思わず息が詰まった。幸い、建物は無傷で、カーテンの閉まった窓から明かりが漏れていた。前にここを離れたときと同じ状態にジャックは思わず安堵した。これはヴィンセントが何度も言っていたことだが、すべてを一瞬にして変えてしまうのが戦争だ。

ジャックがアパートの中に入り、自宅を目指して階段をのぼると、玄関の扉の下から一筋の光が伸びていた。ヴィンセントがもう眠っている時間帯のはずだ。もし明かりをつけたまま寝ているなら起こしたくないと思い、ジャックはそっとノックした。返事がすぐに返ってこなかったので、自分の鍵を取ろうとすると、扉が開いた。ヴィンセントはにっこりと笑ったが、スマホを持ち上げて、何かの最中だったことを身振りで示した。ジャックはおとなしく何も言わずに後ろ手で扉を閉め、ヴィンセントの親指がキーの上を踊るのを見ていた。ヴィンセントが用事を済ませると、二人は抱き合った。ヴィンセントの唇はいつも以上に激しかった。

「ただいま」

「今朝、ニュースを見たから...心配してた」

ヴィンセントは言った。

「お互い、運がよかった」

ジャックがそう答えると、ヴィンセントはジャックの幸運がこれからもいつまでも続くと信じているかのように頷いた。

「まだ起きてたんだな」

「ファルケンベルク城に関する論文をマティアスに送ってたんだ」

ジャックは思わず眉を上げた。ヴィンセントはそれを見て微笑んだ。

「こんな状況なのに意味がわからないって思うだろうけど、三年前にベヤジットと一緒に城を調べたとき、あそこの岩盤が大半のセンサーを通さない性質を持った鉱物でできていること知ったんだ。当然、オムニックのセンサーも通さない。そして、ファルケンベルクには岩盤の中をくり抜いて作られたすごく深い地下室がある。そこならオムニックにも見つからないから、民間人の避難場所としてちょうどいいだろう？オムニックがどこで何を傍受してるかわかったもんじゃないから、直接は伝えられなかったけど、マティアスなら僕の意図に気づいてくれるはずさ」

ジャックは頷いた。ジャックはヴィンセントの気遣いあふれる性格が大好きだった。彼は兵士でないが、誰かの力になるためにいつも全力を尽くしてくれる。

「いい考えだな」

「役に立つといいけどね」

ヴィンセントはそう言って首を振った。

「そうだ、お腹すいてるだろう？」

二人は小さなキッチンの折り畳みテーブルでサンドイッチを食べた。ヴィンセントは最後の二本のビール缶をジャックの前に置く。

「取っておいたんだ」

「大丈夫なのか？」

物資不足の噂を聞いていたジャックは尋ねた。ジャックが所属する部隊の間でも、この話題で持ち切りだった。

「大丈夫」

ヴィンセントは肩をすくめた。

「このあたりの地区は、家庭菜園をやっていたり、裏庭で鶏を飼っていたりする人が多いんだ。隣人同士で助け合ってる。心配しないで」

そして彼は一瞬言いよどみ、言葉を続けた。

「何時間ぐらい、いられるの？」

「四十八時間」

「よし」

ヴィンセントの顔に笑顔が浮かんだ。

「なら、時間が許す限りのことをしよう」

「その前に...お前に話がある」

ヴィンセントは眉を上げた。

「そういう話じゃない」

ジャックがすぐにそう言うと、ヴィンセントは驚いたように笑った。



「強化兵士の計画は、形成を逆転できるチャンスなんだ。お前が住む世界を、お前のことを少しでも守れるなら、たとえどんな犠牲を払ってでも、俺は戦い続ける」

「お前も知っていると思うが、状況があまりよくない」

「まるでこの先は地獄みたいな言い方だね」

ヴィンセントは急に冷静になって言った。

「でも、僕だって馬鹿じゃない。何が起きてるかはそのなりにわかるさ」

ジャックは頷いた。

「オムニックへの対抗策として、とある計画が軍で持ち上がっている。ロボット工学じゃなくて、生物学を使ったな。遺伝子を改変して、奴らとの戦いを有利にする...要は兵士の強化計画さ。俺はその候補者だって言われたよ」

ヴィンセントは少しの間、何も言わなかった。

「誰に言われたの？」

「軍だよ。正確には軍の科学者。ノートンって名前だったかな」

「それって危ないんじゃない？」

「わからん」

ジャックはまっすぐにヴィンセントの目を見た。

「だが、相当危険だろうな。もう何年も前から進めてきた計画だそうだが、安全が完全に立証されてるわけじゃない。クライシスが起きたせいで、計画が前倒しになったんだ。上官は重要な戦力を失うわけにはいかないと、俺を引き留めようとしたが、結局は折れて、俺に参加の命令を下したよ...なんと言っても、これは戦局を変えるうえでチャンスだからな」

「それは、万事うまくいけばの話だろう？」

ヴィンセントは言った。

「もし失敗したら...」

「死ぬまで障害が残るか、死ぬかのどちらかだろうな」

ジャックは答えた。少なくともその点について、強化兵計画の主導者たちは正直だった。

「だがな、今だって安全とはほど遠いんだ」

「僕にはわからないよ」

ヴィンセントは頭を振った。

「ジャック、君は何を言わせたいんだい？僕は今でさえ、君を失いやしないかって心配なんだよ。君がいったいどうしたいのか、僕に教えてくれ」

「俺は、参加したい」

ジャックは言った。

「いいか...俺たちがこの戦いに勝てる兆しはまだない。陣地の維持さえ、いずれはままならなくなる。強化兵士の計画は、形成を逆転できるチャンスなんだ。お前が住む世界を、お前のことを少しでも守れるなら、たとえどんな犠牲を払ってでも、俺は戦い続ける」

ヴィンセントは遠くを見つめていた。自分が知ることのできない未来か、幸せに満ちた過去を見ていたのだろう。そして悲しげに笑った。

「君と付き合いはじめてから、こうなることはわかってた。こういうときに引き下がるようなら、君は君じゃないからね。でも...帰ってきてくれよ、絶対に」

(ああ)

ジャックは黙って誓った。その約束を口に出す資格は、ジャックになかった。

「たとえ俺が変わったとしてもか？」

「人はみな変わるさ」

ヴィンセントは言った。

「とにかく戻ってきてよ、いいかい？」

「何とか、頑張ってみよう」

二人でソファーに向かうと、ヴィンセントはジャックの胸元で両手を組みながら眠った。ジャックはその黒髪を撫でながら、遠くの爆発を見つめた。

イラリーはテーブルの上に浮かぶホログラムに向けて身をかがめた。テーブルクロスの明るいパッチワークに、ホログラムの色彩が反射する。

「これがオアシスの施設だ。パカリナ研究団が持っていた古い建物を、奴らが乗っ取って改修したんだ」

ジャックは鎖き、施設のモデルをじっくり見た。施設は、オデオレインたちオアシスの科学者が知恵とリソースを集結させたかのように、手の込んだ造りをしていた。

「私が調べた限り、敷地周囲の警備は厳重だ」

イラリーは言った。

「正面の出入口と荷物の運搬エリアは、あの手この手を使って監視されてる。だが、研究所の内部は手薄で、関係者しか使えないコード・ロック式の裏口二つの監視は緩い」

「そのロックの対策は、もうソンプラから教わっているのか？」

「心配はいらない。コードはもう手に入れてる」

イラリーは不安げな様子を見せないままそう言うと、間をあけて続けた。

「あなたがソンプラに協力してるなんて、驚いた」

「あの女は誰の味方でもない。そこを理解していれば、あいつにも利用価値はある」
それを聞いて、今度はイラリーが首をかしげた。

「ソンプラが私に用意した見返りはもう見ただろう？教えてほしい...あなたはソンプラから何を得たんだ？」

ジャックはイラリーを見やった。自分がソンプラのどんなところに親しみを感じたのか、なぜ心を許してもいい相手だと思ったのか、うまく言葉にできなかった。

「他では決して手に入らない情報を、あいつは教えてくれた」

ジャックは答えた。

「だとしても...」

「オーバーウォッチに何が起きたのか、その真相の鍵となる情報をな。スイス本部の壊滅は俺とレイエスのせいだと言う連中ばかりだが、あそこで何か別の思惑が動いていたのは確かだ」

ジャックはイラリーの目を見つめて続ける。

「俺には真実を突き止める義務がある。生き残った奴のためにも、死んでいった奴のためにも。壊滅を引き起こした真犯人に報いをくれてやるまで、俺が立ち止まることは決していない」

「そういうことなら...」

まばたきをするイラリーの顔に、年頃には不釣り合いな、深い悲しみがよぎった。「私にも理解できる。太陽の子...あなたたちが“太陽神の戦士”と呼ぶ私の仲間のためにも、私は使命を果たさなければならない」

イラリーは自身のアーマーに触れた。データ・ドライブをしまった部位だ。

「みんなが私たちを守り、恵みを授けるために培ってきた知恵を、オアシスは奪おうと

している」

「太陽神の戦士のデータは、壊滅したときに失われたんじゃないのか？」

「確かに施設は壊れた。だが、データのほとんどは無事だ」

尋ねるジャックにイラリーは答えた。

「パカリナは苦境にあった。だからオアシスと手を組んで、リソースと引き換えにデータを連中に渡したんだ。パカリナはオアシスのリソースで失われたものを取り戻せると思ってたみたいだが、オアシスが信用ならない相手だということは、私にはわかっていた」

「お前も壊滅の時、あの場所にいたんだな？」

罪悪感と悲しみがなくまぜとなったイラリーの気持ちが、ジャックにはわかった。

イラリーは遠くを見つめる。

「私は、戦士の見込みがあると言われてからずっと、みんなの力になろうと鍛錬を積んだ」

「何があったんだ？」

イラリーはホログラムの壁の一か所を指で示した。

「説明するなら...簡単だ」

ジャックは待った。イラリーはホログラムに伸ばしていた手を離した。

「“太陽の燃糸”...一人前の戦士になるための、最後の試練。人のあり方を変えてしまう、苦痛を伴う儀式だ。でも、燃糸を乗り越えれば、太陽の力とつながることができる。だがあの日、今までになかった爆発が起きた。そのせいで、太陽神の戦士は、みんな死んだ...私以外の、みんなが」

「お前はその原因を知りたいんだな？」

ジャックはしばらくの間を置いて言った。

「当然だ」

イラリーの声には、これまでジャックの心に描かれていた彼女のイメージを塗り替える何かがあった。ジャックは伝えたかった。俺は確にお前の問題と無関係だ。だが、秘めた記憶に蝕まれるぐらいなら語ってしまった方がいいことも時にはある、と。だが、彼はそういうやり取りを得意としていなかった。

「爆発が起きたのは、お前の試練の時だった...そうだろう？」

イラリーが目を閉じ、大きく頭を振った。否定しているのではなく、苦しみを振り払うような素振りだった。

「そうだ、私だ。あの時...試練はうまくいった。完璧だった。だけど、私の身体の中で力が爆発した。みんな、一瞬で死んだ。残ってたのは...私だけだった」

イラリーは背筋をまっすぐに伸ばした。

イラリーを見ると、彼女もジャックと同じく過去にふけていた。もはや存在しない大義のために人生を捧げているところも、ジャックと同じだった。

「残骸はすべて調べたけど、何もわからなかった。それでも、データをオアシスに盗ませてはならないことだけは、私にもわかる。あれはみんなの遺志だ。絶対に譲ることはできない」

頷くジャック。頭のどこかでレイエスの叫び声が響いた。奴への怒りのあまり耳に入っ
てこなかった爆発の轟音と、壁が崩れ落ちる音も。ソンプラがここに自分を送った理由が、ふとわかったような気がした。ソンプラの着眼点は正しい。オーバーウォッチに起こったことと、ルナサピで起こったことの間には類似点がある。人類の発展と保護のために尽力している組織が、たった一度の大爆発で壊滅した。爆発の状況は違えど、調べてみる価値はある。

イラリーを見ると、彼女もジャックと同じように、過去にふけていた。もはや存在しない大義のために人生を捧げているところも、ジャックと同じだった。彼が強化兵計画を受け入れたのは、義務感ゆえではない。ヴィンセントや、愛する人々を守るためには、それが自分にできる最善のことだと信じたからだ。ノートンは、リスクについて正直に語ってくれた。ジャックは決死の覚悟で計画に参加し、幸運にも生き延びた。そしてクライシスに勝ち、よりよい世界を目指すべく、オーバーウォッチを平和維持組織へと昇華させた。

だが、それらの成果も一瞬で奪われた。

人生のすべてを捧げてきたものが目の前で崩れ落ちていく時の気持ちを、ジャックは嫌というほどわかっていた。

彼はもう一度頷くと、ホログラムに視線を戻した。

「わかった、もう一度作戦を説明してくれ」

公園を出て土手沿いを歩いていると、霧が立ち込めてきた。ジャックはヴィンセントが震えるのを見て自分の身体が反応するのを感じた。すると、代謝が調整され、寒さを感じなくなった。

「いいディナーだったな」

ジャックが試しに話しかけると、ヴィンセントは微笑んだ。

「そうだね。素敵なお店だった。戦後に開かれたばかりなんだって」ヴィンセントは道を横切った。ジャックも急いで後を追いかけて、川に突き出た足場まで来て歩をゆるめた。信じられないことに、エジプトのオベリスクが青銅のスフィンクス——こっちはエジプトのものではない——の上にそびえ立ち、濃い霧の中にぼんやりと輪郭を浮かばせていた。ジャックはその名前を思い出そうとした。

「クレオパトラの針、だったか」

ヴィンセントは頷いた。

「十一歳のとき、ここに住んでたおじに会いにきて、連れてきてもらってね。また見たいと思ってたんだ」

「損傷しているみたいだな」

ジャックがそう言って近くのスフィンクスにあいた榴弾の穴を指さすと、ヴィンセントは笑った。

「最近できた穴じゃないよ、少なくともあれはね。あの穴は、第一次世界大戦の時にできた傷だ」

一つ目のスフィンクスの横を抜け、オベリスクの近くまで来ると、ヴィンセントは顔をしかめた。

「もう一つは、やられちゃったけどね」

「ああ」

二つ目のスフィンクスがあったはずの空っぽの台座を、ジャックは見た。石は黒ずみ、えぐれていた。一つ目のスフィンクスとよく似たホログラムがそこに浮かび、荘厳に輝いている。その身体も無傷そのものだ。実物は失われてしまったが、新技術の恩恵もあり、少なくともイメージだけは復元できている。

「話したいことがあるんだ」

その言葉を放ったヴィンセントにジャックは顔をしかめた。ロンドンに来たときから、こうなることはわかっていた。二人は一緒に暮らすためにあれこれと模索していた。だが、オーバーウォッチの本部はチューリッヒにあり、ヴィンセントの学者としての拠点はアメリカにある。一緒に暮らすことは実質不可能だった。

「なんだ？」

「ジャック、君と一緒に暮らせないかな？」

ヴィンセントは言った。

「家族になりたいんだ」

「わかってる」

「君がわかってることは僕もわかってる。けど、どれだけ僕が言っても何も変わらないじゃないか」

ヴィンセントは川を見つめた。表情は読み取れなかった。

「俺はストライク・コマンダーになったが…」

ジャックは言った。

「だからといって、俺の一存で本部を動かせるわけじゃない。アメリカなら、ヨーロッパのあちこちでいろんなプログラムを展開しているだろう。向こうの大学のキャンパスすら点在するんだ。本部の近くで仕事を見つけられないのか？」

ヴィンセントは溜息をついた。

「できると思う。僕もその可能性を考えて、いろいろ調べてみたんだ。けど…拠点を移したところで、何が変わると思う？」

「同じ大陸にいられるだろ」

冗談で言ったのではなかったが、ヴィンセントは笑った。

「そうだね、タイムゾーンの面では楽になる。けど、君がチューリッヒにいて、僕がどこか別の場所にいることに変わりはない。僕が君に会えるのは、オーバーウォッチが君を必要としないときだけ」

ヴィンセントは続けた。

「僕は、子供が欲しい。思い付きで言ってるわけじゃないよ？僕だって真剣に考えてきた。仕事と同じくらい家族のことを考えてくれて、子供を育ててくれるパートナーが欲しいんだ。だから…お願いだ。今の仕事をやめられないかな？」

ジャックはまばたきをした。

「無理だ」

「戦争は終わったじゃないか」

ヴィンセントは言った。

「周りの期待以上のことを君は成し遂げた。オーバーウォッチをあんなに大きくしたのだって君だ。君はいつも言ってたよね。自分の元には素晴らしい仲間たちがいるって。もう、みんなに任せてもいいんじゃないか？」

「無理なんだ」

ジャックはもう一度言った。

「俺だって、お前と同じくらい家族になりたい。俺たちだけの家族を築きたい。だが——」

ジャックが言いよどむと、ヴィンセントがそのあとを引き取った。

「今じゃない、だろ？わかった、僕は君を信じて待てばいいんだろう？でも、今がダメなら、いつ離れられるんだい？」

黙って立つジャックのジャケットや靴の底から、川の冷たさが忍び込んでくる。ヴィンセントの問いにジャックは答えられなかった。沈黙はアンフェアだし、間違っている。それでも、ジャックはそうするしかなかった。

「戦争はもう終わった」

ヴィンセントは言葉を続けた。

「僕たちは勝ったんだよ。君は、いつ僕の元に帰ってくるんだい？いつになったら未来に目を向けられるんだい？」

「戦争はまだ終わっちゃいない」

ジャックも言葉を返した。

「終わってくればどんなによかったか。だが、クライシスの被害を受けた地域や国々では、この機を逃すまいと舌なめずりする連中が大勢いる」

「君の言い分も受け入れるよ」

ヴィンセントは言った。

「けど、その戦いが終わった後でどうするつもりさ？」

ジャックはヴィンセントの肩越しに川を見やった。流れに乗ってゆっくりと川を下る船の明かりが霧でぼやけている。庭のある家が欲しいと、ジャックはできれば言いたかった。お前と、俺たちの子供と、庭で一緒にバーベキューをして、ソックスのままサンダルを履いて、やたら高い金をふっかけるテーマ・パークで遊びたい。平和に暮らしたい――。だが、その想像には現実味がなかった。ゆえに、口に出しては言えなかった。

「歴史家が未来のことをそんなに気にするなんて、変な話もあったもんだ」

ヴィンセントは笑った。

「歴史も変化の足跡すぎない。この分野を学んでわかることは、すべてがいつまでも今のままじゃいられないということだけだ」

「変化を受け入れられなかったらどうするんだ？」

ジャックは強化兵計画への参加時と同じ質問をしたのを思い出し、顔をしかめた。あの決断も簡単ではなかったが、それでも強化兵計画には、参加するだけの価値があった。だが、本当にそうなのだろうか？

「強化兵計画の話が持ち上がる前から、僕は君のことが好きだった」

ヴィンセントは言った。

「オーバーウォッチ設立の前から、クライシスの前から、あの変なビールを作った僕を君が助けにきてくれたあの日から、僕はずっと君を愛してる」

「愛している、が…」

「ああ」

ヴィンセントは頷いた。

「僕らに未来があることを確かめたいんだ」

ジャックはどう答えていいかわからなかった。あると言いたかった。ヴィンセントが望むすべてを約束したかった。当のジャックもそれを望んでいた。どうにかする方法は必ずあるはずだ。周囲だってこの状況をどうにかしてきた。オーバーウォッチのような巨大組織でさえ、今の仲間がいればどうにかなるはずだ。だが、ジャックには言えなかった。彼には、周囲の人々にはない責任があった。これまでに経験してきたあらゆる失敗と損失が、ジャックに重くのしかかっていた。世界を守るために声をあげた者の責任が。オーバーウォッチはまだ未熟で、脆弱だ。ジャックがいなければあの組織の仕事は回らない。犯罪者は野放しになり、人々の命がさらに失われるだろう。代償はあまりにも高かった。たとえ一緒に暮らせなくても、ヴィンセントが生きる世界を守るためにできる限りのことをしているのだと思えば、心もいくらか和らぐかもしれない。

ヴィンセントの顔に浮かぶ悲しげな表情を正視できず、ジャックは思わず目を閉じた。

「俺もお前との未来を望んでいる」

ジャックはようやく答えた。

「心から望んでいる。だが約束はできない。お前に嘘をつきたくないんだ」

ヴィンセントは笑いながら泣くような声で言った。

「わかってる。君は嘘をついたことなんてない。僕は君のそういうところも大好きだよ。だけど…」

ジャックはヴィンセントの目を見た。

「すまない。俺も…」

どう言ってもいいかわからなくなり、ジャックは口を閉じた。自分が何を望んでいるにせよ、それは現実にはならないとわかっていた。ヴィンセントは頷いた。

「僕もだよ」

「お互いに怒鳴り合うよりはいいな」

「そういうのは僕たちには合わないからね」

ヴィンセントに誘われるまま、ジャックは彼を抱きしめた。ヴィンセントの唇はますます濃くなる霧の味がした。ジャックはこれが永遠に続いてほしくて、両目を閉じていた。このキスの中で生きて、その後のことは忘れたかった。

そしてヴィンセントは身体を離れた。ジャックは引き留めようとはしなかった。

「いつか戦争が終わって、自分の人生を見つけれたら、僕に連絡してくれ。その時ま

「いつか戦争が終わって、自分の人生を見つけられたら、僕に連絡してくれ。その時また会おう」 ヴィンセントはそう言って、ジャックに背を向けた。

た会おう」

ヴィンセントはそう言って、ジャックに背を向けた。

ジャックはヴィンセントが霧に消えるのを見守り、スマホを取った。着信が七つ来ている。すべてオーバーウォッチからだ。俺は世界のために正しいことをしたまでだ——。ジャックはそう信じた。

だが、彼の心に残ったのは虚しさだけだった。

ジャックはイラリーに続いて細い山道を下った。パイザーのナイトビジョンはすでにオンにしてある。三日月は沈みかけた位置にあった。オアシスの施設に潜入するには絶好の夜だ。ただし、オアシスが最新鋭のセンサーを配備していたり、繁華街のようなライトで敷地を照らしたりしていることは、想像がつく。イラリーが教えてくれた計画は、ジャックが陽動で警備員の注意を引いている隙に、彼女が関係者用のコード・ロック式の扉を開けるというものだった。計画がシンプルなのは好ましいことだが、オアシスが相手となると、仕事が単純に済むことはないだろう。

イラリーは警告するように手を上げ、道の先端にしゃがんだ。ジャックはその横に片膝をつき、低木の茂みの隙間から下の建物を見た。オアシスは建物やフェンスの間の地面を整理し、一定の間隔で警備用のタワーを配置していた。視界内にいる警備員は四人。ジャックがHUDを調整すると、遠くのフェンス沿いにも三人見えた。

「嚴重だな」

「前はこんなにいなかった」

イラリーはつぶやいた。

ジャックは警備員たちがタワーの下を行ったり来たりするのをじっくり見た。タワーには自動兵器がありそうだ。おそらくは小型の爆弾も。オアシスの人員は限られているか

ら、そういった代物も連中なら躊躇わず使うだろう。二つの警備用のタワーの間の地面がわずかにくぼんでいた。イラリーの言うとおり、潜入ルートとしてはうってつけだ。エンスの向こう側の建物は比較的暗くなっているから、研究所の扉までなら楽にたどり着ける。北側にある正面ゲートはここから見えなかったが、別の大きな建物の向こう側を左へと曲がるフェンスの先にあるはずだ。大型の機材を研究所に運び込むためのゲートは南側にあるが、それもここからは見えない。もし両方のゲートで陽動を行い、侵入しようとしているように見せかけることができれば、警備員を持ち場から引き離せるだろう。そうなれば、施設へ安全に侵入できる。

「センサーはどうする？」

「あれは役に立たない。ここは野生動物が多いから、間違って鳴ることが多いんだ」

そう言うといラリーは、にやりと笑みを浮かべた。

「それに、センサーの一部に細工もしてある」

好都合だ。ジャックは拳ぐらいの大きさの装置を二つ取り出した。数年前に、グランド・メサのウォッチポイントからパルス・ライフルと一緒に盗み出してきたものだ。そのうちの一つを渡してやると、イラリーは注意深くそれを調べた。

「グレネードか？」

ジャックは首を横に振った。

「音を出すだけだ。オーバーウォッチでは、敵の攻撃を引きつける時にこのデバイスを使っていた」

ジャックはイラリーに使い方を教えた。

「こいつは銃声を出す。警備員は、二つのゲートの上の斜面で誰かが動いていると思うはずだ。侵入の時間を十分に稼げる」

イラリーは念入りに装置を調べ、頷いた。

「わかった」

そして装置を手にして影の中へ消えていった。

ジャックがここまで来た道に戻ると、そこには獣道があった。そして尾根のてっぺん沿いに続くその道を、彼は目立たないように進んだ。立ち止まって状況を確認すると、警備員たちはそれぞれの持ち場を規律正しく巡回していた。陽動で連中を揺さぶることができればいいが。

正面ゲートの向かい側は坂道になっていた。東から連絡用の道路が、二つの丘の隙間をのたくるように伸びている。ジャックは銃声を発生させる装置を丘の中腹に置き、静かに離れた。そして、少し離れた場所にちょうどいい物陰を見つけ、一握りの石を集めた。そのうちの一つを丘から投げる。石が音を立てながら下草をくぐっていくと、ゲートを見張る

するとしばらくの間、配線の切断を試み
ていたイラリーの髪全体が太陽のこく
黄金に輝いた。その指から光が放たれ、
やがてフェンスのライトが消える。

警備員の一人が頭を持ち上げるのが見えた。最初の石の右側に向かってもう二つ投げ
る。別の二人の警備員が立ち止まって何かを相談し合い始めた。他の石からそう遠くない
ところを狙って、もう一つ。今度は、警備員が別の一人に手招きしているのが見えた。別の
男がフラッシュライトを取り出し、斜面を照す。

その時、例の装置が起動した。強烈な騒音が駆け抜け、短い閃光がいくつも飛び交う。
ゲートの警備員が叫び、施設から増援が湧いて出てくるのを見て、ジャックは退散した。
倒れた木が逃げ道をふさいでいたので、持ち上げて斜面から落としてやると、警備員が
また叫ぶのが聞こえた。

ジャックが丘の上へ逃げると、目の前にイラリーがいた。茂みの中でしゃがみ、目標の
出入口を見ている。そしてフェンスの南側にいる警備員たちを指さした。

「まだ残ってるのがいる」

「まあ、待て」

ジャックが頷いてそう言うと同時に、イラリーが仕掛けた装置が起動した。フェンスの
警備員は音の方へ向かっていった。裏門からも叫び声が聞こえ、視界に入っていた警備
員のうち二人が小走りで去っていった。三人目は躊躇していたが、そのうち二人のあとを
追った。

「今だ」

フェンスへとたどり着いたイラリーの後ろに位置するくぼみにジャックは降り立ち、
援護の準備を整えた。肩をひそめ、辺りの気配に集中する。するとしばらくの間、配線の
切断を試みていたイラリーの髪全体が太陽のこく黄金に輝いた。その指から光が放た
れ、やがてフェンスのライトが消える。

「いいぞ」

ジャックはイラリーの後に続いて、フェンスの隙間を抜けた。

二人は研究所の建物の影に隠れた。入口横のロック・パッドがかすかに光っている。イラリーはライフルを肩にかけ、コードを打ち込んだ。カチツという音がかすかに聞こえたかと思うと、扉がゆっくりと開いた。

「入ろう」

内部は暗く、無人だった。これまでのところ、イラリーの情報に誤りはない。背後の扉がロックされているかをジャックが確認していると、イラリーが右側の通路を示した。

「こっちだ」

ジャックはイラリーの後ろを追いながら、警備員や残業中の技術者がいないか警戒した。夜の研究所は業務時間外ということもあり、確認する限り誰もいない。

「メイン・コンピューターの場所はわかるのか？」

声を出すのは危険だったが、ジャックはあえて質問をしてみた。

イラリーはすぐには返事をしなかった。聞こえていなかったかと思ったが、やがて彼女は震えるように息を吐いた。

「こっちだ...たぶん」

もっと自信を持って、と言いたかったが、彼女には逆効果だと思い、ジャックは言葉を飲み込んだ。

「中央の方か？」

「その可能性が一番高い」

通路が交差する場所まで来ると、イラリーは立ち止まってその場を調べた。

(気をつけろよ)

ジャックは警戒する。イラリーは目をまたたかせ、身体を震わせながら左を向いた。ジャックは後に従った。

その通路にはさらに大きな研究室が並んでおり、小さな窓からは、巨大な機械や育ちすぎた奇妙な植物、見たこともない爬虫類がその姿を覗かせている。オアシスは、このルナサピでも抜かりなく研究を進めているようだ。イラリーは、窓のない重厚な扉の前で止まり、キーパッドを調べた。

「ここか？」

ジャックが聞くと、イラリーは頷いた。

「コードは知ってる」

言いながらキーの上で指を動かし、コードを入力したが、赤い光が点滅した。

「くそっ！」

イラリーは扉をにらみつけ、ライフルに手を伸ばした。扉を撃ってこじ開けるつもりらしい。そんなことをすればすべてが台無しだ。ここまで警備員を避けてきた苦労も無駄に

なる。だが、ジャックが口を出す前に、イラリーは自分の感情を制し、再びキーパッドに向かった。今度は、扉が開いた。

ジャックは扉の内側の壁に張りつくようにして周囲を調べた。一方のイラリーは、一つの端末を起動してはその機能を確かめ、また別の端末へと向かう。そして、ある端末の前で、小さく声を立てて止まった。

「あった」

ジャックはその声に動揺が混じっているのを気に入らなかったが、最後に一度だけ通路の方を一瞥し、イラリーのもとへ向かった。イラリーがさらにキーを叩くと、いくつもの画面が表示され、やがて一つの画面が現われた。フォルダのリストのようだ。

「これだ」

イラリーはそっと言った。

「データのリストだ」

「確かなのか？」

ジャックは画面をじっくり見た。リスト内のフォルダの数は膨大だ。きっと、表示されているフォルダの中にも別のものが含まれているのだろう。オアシスは予想を上回る量のデータを回収していたようだ。

「間違いない」

イラリーの声色に明らかな動揺があった。

「残されたデータのすべてがここにある」

ジャックは心配そうな視線を向けたが、イラリーはすでにアーマーの中に手を入れ、ソンプラのドライブを取り出していた。イラリーはそれを接続し、文字列を入力すると、急に画面に大量の記号が表示され、半歩退いた。

「問題か？」

ジャックが聞くと、イラリーは首を横に振った。

「ちゃんと読み込んでる」

心配するな、ソンプラは優秀だー。ジャックは自分に言い聞かせた。そして、ソンプラは確かに優秀だった。画面に再びフォルダのリストが表示されると、データのすべてー太陽神の戦士の足跡と英知ーが、消えはじめた。

イラリーは拳が震えて青白くなるほどに両手を強く握り、顎を噛みしめている。その想いと、責任の重大さをジャックも知っていた。太陽神の戦士の知恵に宿る力は、放っておくにはあまりにも大きすぎる。そして、戦士たちの知恵を守るのはイラリーしかない。守るためには、壊すしかなかった。ジャックもまた、オーバーウォッチが崩壊し、世間では死んだことになってからも、組織の遺志を背負ってここまで歩き続けてきた。彼がこの孤

イラリーは拳が震えて青白くなるほどに両手を強く握り、顎を噛みしめている。その想いと、責任の重大さをジャックも知っていた。太陽神の戦士の知恵に宿る力は、放っておくにはあまりにも大きすぎる。そして、戦士たちの知恵を守れるのはイラリーしかない。
守るためには、壊すしかなかった。

独な道のりでたびたび抱いてきた感情は、彼女がいま噛みしめているものと同じだ。

最後のファイルが消えたとき、二筋の涙がイラリーの頬を伝っていた。震えながら端末の上に身をかかめ、ファイルが完全に破壊されていることを確かめるイラリー。

彼女はついに、本当の意味で“最後の太陽の子”となった。

イラリーが立ち尽くす意味を理解するジャックは、彼女を急かそうとはしなかった。

扉の方を見やり、フェンスの警備員たちが陽動に気づくまでにどれだけの時間が残されているかと考えていると、やがてイラリーが頷いた。

「終わった」

「なら、行くぞ」

二人は来た道を引き返して建物を抜け、出入口で立ち止まり、ジャックが外を調べた。フェンスのライトはまだ消えていた。フェンス沿いに動いているものは何もないようだ。

「今だ、行け」

イラリーがフェンスの隙間を目指して駆けた。ジャックは建物の影でイラリーを援護する。イラリーはフェンスを抜け、下草の中に消えていった。しばらくして、彼女が再び顔を出した。ライフルを構えている。ジャックはイラリーの元へ走った。隙間を抜けるのに少し手間取ったが、斜面を登り、イラリーの横の茂みに入る。ほんの数秒後、フェンスの非常用ライトが点いた。間一髪だった。

「もう大丈夫だ」

イラリーの声は、誇りと悲しみに満ちていた。

イラリーの隠れ家まで、何の問題もなく帰ってこられた。ジャックは椅子に腰を下ろすとバックパックを出し、装備の点検と交換を済ませた。イラリーは隠れ家のモニターをじっと見ていたが、やがてこちらを向き、データ・ドライブを差し出した。

「これを」

ジャックが驚いてまばたきをする、イラリーが付け加えた。

「エネルギーの測定値と私の太陽の燃系の映像だ。この二つがオーバーウォッチでの出来事とどう関係しているのかは、私にはわからない。だけど、あなたの使命に役立つのなら、私はこれで礼をしたい」

ジャックはデータ・ドライブを受け取った。これほど大切なものを彼女が託す意味ならわかる。ドライブに含まれているデータはジャックだけでなく、イラリーにとっても希望を意味していた。

「データを分析したら、必ず結果を伝える」

ジャックはドライブをバックパックにしまうと、一度持ち上げて重量のバランスが取れているか確かめた。オアシスの警備部隊が都市の調査に本腰を入れる前に、そして例の飛行機が飛び立つ前に、この土地から脱出しなければ、だが——。ジャックはイラリーとの絆を感じていた。彼女を守ってやらなければとも。それは、長年抱くことがなかった感情だった。

「オアシスはお前を探すはずだ」

「心配するな。これまでも、やりおおせてきた」

イラリーは画面から視線を上げなかった。

「あれが私の仕業だという証拠も残してない」

「どうかな」

ジャックは言った。

「何が消えたかわかれば、誰かが太陽神の戦士の秘密を守ろうとしたと気づくだろう。そうなれば、奴らは狙いをお前に絞るぞ。モイラ・オデオレインは頭がキレるうえに危険な女だ。用心するに越したことはない」

イラリーは端末から振り向いた。

「頭がよくて危険なのはソンプラだって同じだろう？」

「あいつにも用心した方がいい」

ジャックは言葉を足した。

「役には立つがな。だが、オデオレインは容赦ないぞ。別の組織とのつながりがあるうえに、お前に想像できないようなリソースを持っている」

言い返してくるかと思ったが、イラリーは顔を歪めるような笑みを浮かべて頷いた。少なくとも、話を聞く気はあったようだ。

ジャックは息を吐くと、心にしまっていた言葉を口に出した。

「わかっているとは思うが...このルナサビに居続けなければならん理由など、お前

にはない。あり得たかもしれない人生に想いを馳せながら仲間の墓を守り続ける以外にも、お前が進める道はある。助けになりそうな連中なら、俺が――」

「あなたが何を言いたいのかはわかる。でも、これは私の責任だ。自分のことは自分で何とかする」

ジャックは思わず顔をしかめた。自分にそっくりだ。ヴィンセントの声までもが聞こえてくるような気がする。未来を選ぼうとしなかったジャックを責める、あのうつろで悲しげな声が。

「かなり昔の話だが、すべての戦争には終わりがあると言われたことがある。俺自身の戦いもいつかは終わるってな。そいつはこうも言った。自分の戦いが終わった後に描く未来はあるのかと。俺にはそんなものがなかった。考えたこともなかった。だから、今も俺の戦いは続いている。それもそろそろ終わろうかっていう今になって、俺は、あの時の選択を後悔している」

イラリーの髪が黄金にきらめいた。

「私の使命はまだ終わってない!話が単純じゃないことは、あなただってわかっているはず。私は、太陽の子たちの遺志を守らなければならないんだ」

イラリーは遠くを見やって、落ちつきを取り戻そうとするように、ゆっくりと頭を振った。

「この使命がいつ終わるのかはわからない。けど、責任は必ず果たす。これが私の選んだ道だ。自分の選択を悔いる真似はしない。私はこの道を、誇らかに歩いてみせる」

「そうか...頑張れよ」

ジャックが言葉を返すと、イラリーは彼の心からの励ましを汲むように、真剣に頷いた。

ジャックはバックパックを担ぐと、ルナサビから続く長い道のりを歩きはじめた。

(ヴィンセントとイラリーは気が合っただろうな)

ジャックは、ふと思った。口論ぐらいはするかもしれないが、あの二人なら、お互いの気持ちをわかり合えていたはずだ。互いに選んだ道を後悔していないという意味でも。ジャックは自分が重ねてきた選択の数々を後悔していた。あんなことをしなければと思うことや、やり直したいと思うことが、あまりにも多かった。

(そいつが問題なのかもしれない)

そんなことを自分が考えると思ってもいなかったジャックは、不意に立ち止まってしまった。日陰と日なたが相半ばする朝の道に、聞きなれない鳥のさえずりが響く。オーバーウォッチが壊滅して以来、ずっと自分が足踏みをしている気がするの、そのせいなのかもしれない。クライシスの後、世界を守ることに、あれほどこだわっていたのも。心の奥底では望んでいるのに、自分には許されないと決めつけてばかりいた。

選んだ道を引き返すことはできない。今こそ未練を断ち切り、新しい道を辿る時なのかもしれない。

ジャックは両目を閉じ、選ばなかった道を進む自分を想像した。ヴィンセントと結婚し、彼が研究を続ける一方、自分はコンサルタントへと転職する。一緒に子供を育て、夏には家族全員でヨーロッパを旅する。ローマやウィーン、ビルカ、ファルケンベルク…世界の平和を誰かの手に委ねて、博物館や田園地帯を楽しむ日々——だが、そんな未来はとっくの昔に過ぎ去っていた。選んだ道を引き返すことはできない。今こそ未練を断ち切り、新しい道を辿る時なのかもしれない。

ルナサピを見わたす尾根の頂上まで来た。ずんぐりした塔がいくつも、陽光に向かうようにして立っている。背後にそびえる森林のにおいを運んでくるそよ風がさわやかだった。ジャックは上着の中に手を伸ばし、一番奥の胸ポケットを深く探った。そこにあったのは一枚の写真だった。ジャックは擦りきれた端を指で撫でながら取り出すと、写真をじっと見つめた。自分とヴィンセントが、お互いの肩に腕をまわし、笑顔でこちらを見ている。クライシス以前、どんな人生も選べた頃の二人だ。風が吹き、写真を持つ指の力が思わず強くなる。ずっと前から、この写真を持ち歩いてきた。愛する人との日々の最後の証。自分が戦う理由を写した忘れ形見。この先、また見返すのも悪くない。持っていても困るということはないだろう。だが、それはもはや記憶ではなく、あり得たかもしれない人生の幻影でしかなかった。風がさらに強く吹くと、ジャックは指の力を解いた。写真が太陽に向かって舞い上がるとき、最後に見えたのはヴィンセントの笑顔だった。

ジャックはそれに笑顔を返し、背を向けた。



著者紹介

Melissa Scott - アーカンソー州リトルロック生まれ。ハーバード大学で歴史学を研究し、ブランダイス大学で博士号を取得。オリジナル小説とタイアップ小説四十編以上と、短編小説数編を出版。その多くでクィア関連のテーマやキャラクターを扱う。ラムダ文学賞とスペクトラム賞をそれぞれ四度獲得。